

大阪 A・P・S コンソーシアム 介護スキルラボ
介護職技能実習生に対する講師派遣 報告書

報告者 社会医療法人ペガサス 今西 崇

報告日：2019年8月28日（水）

実施期間：2019年6月26日（水）～7月27日（土） 計32日

実施場所：ベトナム ハノイ ホアンロン教育第二センター

1. 目的

- 1) アジア健康構想の一環である、外国人技能実習制度における介護職に関する知識・技能移転、日本・ベトナム間の人材還流のため、ベトナム現地に講師を派遣し介護技術・知識の指導を行う。
- 2) ベトナムでの生活で、文化や習慣、国民性を知る。ベトナムでの生活を体験することで、現在来日している一期生や、来日予定二期生の日本での生活を送る実習生の気持ちを知り、第二フェーズに活用する。

2. クラス紹介

Aクラス 10名

N3取得1名、残り全員がN4取得しているため、授業の進行は比較的スムーズである。授業内容は概ね理解できているが、介護の専門用語や難しい単語については、簡単な単語に言い換える、または通訳を介する場面もある。音読は言い間違いがあるが指摘すると正しく修正できる。授業中積極的にメモを取り、学習意欲は高く、理解できないことがあると質問があり、理解しようとする姿勢が見られた。

Bクラス 9名

N4取得8名、N4未取得者1名（8月2日現在）

Aクラスに比べおとなしい印象。日本語能力についてもAクラスと比較すると全体的に習熟度は低く、個人差はあるがテキストは読み間違いが多く、同時に内容を理解するのは難しい様子。授業、日常会話はゆっくりと話すことで伝わる。講義内容、単語の理解が難しい場合は、通訳を介して理解できる場面が多い。音読や聴解力に個人差があり、個別対応が必要である。予習・復習に関しては積極性が低い印象であった。講師期間終盤には予習復習にも取組全体的に日本語能力が向上し、実習生の努力が見られた。

3. カリキュラム内容について

1) 衣類の着脱の流れ（介護の知識・技術カリキュラム、入国後講習応用編）

介護導入講習テキストを用いて右麻痺利用者、座位状態を想定。まずは座学で、脱健着患を基本とした流れと介助方法の一つひとつを確認。その後、一つの場面、介助についての声かけも実習生が考え、ノートに記載、発表をおこない、情報を共有。実技練習は、実習生同士で介助者役と利用者役になり実施。自立支援も意識した声かけ、痛みの確認、転倒リスクに対して意識した介護者の立ち位置、痛みの確認、衣類の伸縮性を考慮すること等も指導。根拠に基づいた説明をすることで理解が深まった。またプライバシーに対しての配慮も忘れないよう指導する。細部に渡り声かけや介助方法を修正・指導し、繰り返し演習することで徐々に上達していった。



2) 入浴の介助で知っておく知識、入浴介護の流れ、入浴以外の体を清潔にする方法（介護の知識・技術カリキュラム、入国後講習応用編）

介護導入講習テキストを用いて、入浴環境では物品名や使用方法、浴室の温度調整、転倒リスクの説明。汚れやすい体の部位の理解も深める。衣類の着脱の流れの講義同様、まずは座学でシャワーをかける、洗身・洗髪介助、浴槽への出入りなど、基本の流れを確認。その後も、一つひとつの介助についての声かけを実習生が考え、ノートに記載、発表までおこない、情報を共有。実技練習は、シャワーキャリー座位状態の利用者を想定。湯温の確認、利用者には足先、抹消から順にシャワーをかけるなど入浴介護の基本から、自立支援、残存機能活用を意識した介助方法とプライバシー配慮について指導する。声かけ、介助手順を確認し繰り返し演習した。入浴以外の体を清潔にする方法では手浴・足浴・清拭・ドライシャンプーについて講義。必要物品、湯温、プライバシー配慮について説明。

3) 褥瘡の予防（介護の知識・技術カリキュラム、入国後講習応用編）

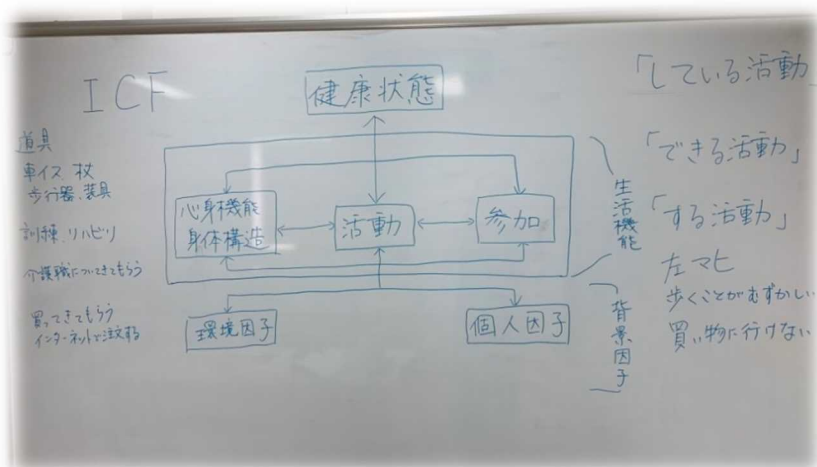
褥瘡発生の直接的要因である皮膚及び軟部組織への持続圧迫と、血液の循環障害を説明。低栄養や皮膚トラブル、介護力不足などその他の要因や、発生しやすい状況、体位別好発部位を学習し、栄養改善や体位変換、清潔保持で予防または改善できることも学習する。

4) 人権と尊厳の保持

青本、介護職員初任者研修テキストを用いる。高齢者の生活背景や、現在の介護が必要な状況を理解し、人権・尊厳を意識し、役割を実感してもらえよう支援していくことを説明。人権が侵害される虐待についても触れ、プライバシーの権利、個人情報、守秘義務についても学ぶ。人権・虐待・プライバシー・個人情報について、自分自身の生活に置き換え、保障されていることの大切さに気づき、高齢者も同様であることが理解できていた。業務上で知り得た情報や写真を SNS に投稿することは禁止であることも説明。人権と尊厳については単語、漢字の理解に時間を要した。

5) 自立支援・介護予防

青本、介護職員初任者研修テキストを用いる。利用者主体・自己決定権の尊重を講義。ADL、QOLを復習し理解した上で、ICFを説明。「している活動」「できる活動」「する活動」については、具体例として、脳疾患後遺症で歩行困難になり、自分では買い物に行けなくなった利用者に対してどのような支援が必要かを検討しあった。介助が必要でも環境や手段を変え、社会資源を利用することで自立できるようアセスメントを取り、計画・実施・評価することの重要性についても説明する。高齢者に多い病気については生活習慣病、心臓や肺、腎臓、泌尿器、脳血管障害などについて理解を深めた。元々看護師としての知識がある実習生がいるため、比較的理解は早かった。



6) コミュニケーションの技法

介護職員初任者研修テキストを用いて講義。コミュニケーションの意味、送り手と受け手の言語や価値観など環境を知ることの必要性、言語・非言語チャンネルを説明する。利用者だけでなく家族の心理や価値観も知ることで、感情を共感し信頼関係形成につながることも説明する。ここでは言い間違いによるコミュニケーションのズレが信頼関係の崩壊につながることも説明する。

7) こころとからだのしくみ（食事・入浴・排泄）

介護職員初任者テキストを用いる。日常生活を営む上で必要な食事・入浴・排泄に関する項目を老化による変化の理解を含め、こころとからだのしくみ、介護職としてのかかわり方について講義。

食事は食べる動作や栄養バランス、食欲を理解し、口腔内のしくみ、摂食・嚥下、食事介助を動画で確認。姿勢、環境に配慮し、嗜好やおいしく食べるための支援、食事の用具、食べ物の形態、誤嚥・窒息・脱水防止、口腔ケアについても理解を深めた。

入浴は日本人の風呂の文化から説明。入浴で得られる清潔保持や発汗・リラックス効果、入浴介助の一連の流れを理解した上で、気持ち良い入浴支援や、利用者にあった介助方法、事故防止を動画で確認。プライバシー、入浴関連用具、皮膚トラブルについても説明する。

排泄はまず尿意を感じ、後始末までの一連の排泄行為の流れを確認。こころと排泄は互いに影響を与えることを学ぶ。気持ち良い排泄の支援、尿便意、排出のしくみを理解した上で、排泄介助、関連用具を動画で確認。尿便失禁や下痢など精神機能が及ぼす影響についても理解を深めた。

8) 障害の理解

ノーマライゼーションとインクルージョンの違いを説明。ICFについては復習。視覚障害と聴覚障害については、それぞれの疾患を説明し、コミュニケーション方法や心理の理解も説明。日常生活上の必要な介護と配慮すべき点を考えもらい、発表をおこない、実習生同士で情報を共有した。

4. 生活について

まずは体調管理に努めた。外出時は、箸や食器を除菌シート等で拭き、生水は勿論だが、氷の入っている飲み物は避け、火の通っているものを注文するなど、衛生面に対して気を付けた。前任講師や坪忠典氏に同行していただき、講師マンション近くの飲食店を紹介していただき、夕食や休日に活用。メニュー表を見ても分からないものは、スマートフォン翻訳アプリを使用したり、隣のテーブルと同じものを注文するなど、楽しみながら生活を送ることができた。路線バスは、利用した2区間は日本円で35円と45円で定額制であった。高齢者や、自分より年上の方が乗車してくると自然と席を立ち、譲り合う姿を見た。ベトナムでは当たり前のように、見習うべき点だと感じた。タクシーやバイクタクシーについては、遠回りしていないかを、スマートフォンアプリで位置情報とルートを確認しながら乗車していた。実習生に対して公共交通機関の利用方法や買い物についても文化の違いがあるためレクチャーが必要と感じた。APS講師約1か月、短期間ではあるが様々な経験をすることができた。実習生は3年。希望もあるが、沢山の不安も持ち合わせての入国になる。言葉や文化など様々な違いに戸惑い、慣れない環境で仕事し、生活を送ることへの不安があることを、自らベトナムで体験し認識できた。第2フェーズを向かえる実習生の不安要素を払拭できるよう体制を整えたい。

5. まとめ

私が2期生に対して実感したことは、聴解力が低いこと。言語化力も弱く、単語の言い間違いや助詞の間違いが多いことも挙げられる。実習生が授業で発表する際、言葉に詰まると生徒同士ベトナム語で答えを教え合い、助け合う場面が多く見られた。まず自分で正しい表現を考える癖をつけてほしいこと、周りが助けてくれることに慣れてしまえば、日本に入国してから困るのは実習生自身であることも伝えた。実習生の単語や文法に間違いがあっても私からすぐに修正をせずに、正しい表現を引き出し、実習生の語学力向上を考え授業を実施した。

座学が長くなると、しりとりや魚偏のクイズなどのブレイクで気分転換を行い、日本語の勉強にもなるよう工夫を凝らした。

私が担当した時点で、Bクラス4名がN4未取得であった。ホアンロンからの要請もあり、講義後に30分程度ではあるが、過去のJLPT聴解問題を活用し補修の時間を設けた。三択または四択問題であるため、答えた根拠も確認し一つずつ解説もおこなった。私が帰国後、7月のテストで4名中3名の合格を知ったが、2期生全員での入国を期待したい。全カリキュラムが終了する頃には日本語力と、日本式介護が更にレベルアップしている姿にも期待したい。



6. 最後に

派遣期間を無事に務めることができたのは、坪忠典氏からの沢山の支援、調整でお世話になったアインさんとハインさん、通訳のハー先生、日本からは愛仁会長尾部長を始めA・P・Sメンバーの皆様、派遣期間中、部署を守ってくれたスタッフの協力あつての事と感謝しております。前年度講師の方々作り上げたシラバスにより、カリキュラムが円滑に進行できたことも忘れてはいけません。

馬場理事長、田中局長、魚野シニアアドバイザー、貴重な機会を与えていただいたことに感謝すると共に、A・P・Sコンソーシアムに関わる全ての方々に心より厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

